

中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査

高屋敷 真人

要旨

本稿は、コミュニケーション・アプローチの理念に基づき、関西外国語大学留学生別科の中級日本語コース（レベル5/レベル6）の教材開発過程で行われた接触場面アンケート調査について報告するものである。この調査の目的は、学習者のニーズや興味・関心を重視し、学習者を起点としたコミュニケーション場面〔接触場面〕からのシラバスデザインや文法項目の設定を行うこと、更に、学習者の要望に対応し得る「モジュール型教材」の作成のための資料とすることである。

【キーワード】 中級日本語、コミュニケーション・アプローチ、学習者主体、モジュール型教材、接触場面

1. はじめに：理論と背景

1.1 関西外国語大学留学生別科日本語コース概要と使用教材

関西外国語大学留学生別科の中級日本語コースは、中級前期（日本語5: Japanese 5 以下、JPN5）と中級後期（日本語6: Japanese6、以下、JPN6）の二コースで教えられている。このレベルの留学生の学習歴は、勿論、世界各国それぞれの機関によって異なるが、初級を1年半ないし2年で終えて来た学習者が多い。本学の日本語コースで学習したと考えると、初級レベルを（JPN1～JPN4: 初級テキスト『げんき I』、『げんき II』を使用）2年（4学期）で終えたレベルである。なお、本学の日本語コースは、1学期は15週間で、90分授業を週3回行っている。JPN5とJPN6のコースの目的は、日本語能力試験N2レベルに合格するための日本語能力の養成である。JPN5とJPN6の双方で使用されている教材は、筆者を含めてプロジェクト・チームを組み、本学教員によって開発されたものである。また、関西外国語大学留学生別科では、2008年秋学期（9月～12月）よりJPN6のメインテキストとし

て、モジュール型教材の開発プロジェクトが新たに始まり、以後、毎年、新しい教材の試用と留学生へのアンケート調査が続けられている。このプロジェクトは、2014 年度には、関西外国語大学国際文化研究所（IRI）の共同研究プロジェクトにも採択され、過去 5 年間、更に詳しく学生へのアンケートの調査結果を分析し、それに基づいた教材の改訂が行われている。

1.2 接触場面

昨今、具体的データに基づいた複数の異なるアプローチによって初中級の文法シラバスを作成し、今後の文法シラバスを再考していく試みについて報告されている（庵・山内 2015）。また、既存の日本語教育の文法シラバスが初級では「シンタクスに関わる狭義の文法」を扱い、中上級では「複合辞を中心とする機能語の学習」になってしまっているとの指摘もある（小林 2009:40-41）。現行の日本語教育のこのような状況に対して、野田は「学習者の多様化に対応する文法」あるいは、「日本語学に依拠しない」、「日本語学習者が日本語でコミュニケーションする時に必要な文法」への見直しの必要性を提案している（野田 2005:1-2）。日本語学習者のコミュニケーション能力を真に育成するためには、「言語学的な研究から出発し、その論理で教育内容を決めるというやり方をやめ」、「日本語を使う状況から出発し、その状況でどんな能力が必要かを考えて教育内容を決めるようにしなければならない」という指摘がなされている（野田 2005/2012:4）。

先行研究では、主として、「名大会話コーパス」、「朝日新聞データベース」「新書コーパス」「BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）」などの日本語コーパスを利用した分析が行われ、それ以外では、初級に特化したものとして、田中によって初級総合日本語教科書の準全数調査が行われ、「初級総合教科書から見た文法シラバス」（田中 2015）なども報告されている。2008 年に本プロジェクトを始めてから、新しい中級教材開発を始める際のシラバス調査は、中上級レベルでは、上記のようなコーパス分析が中心で、それ以外は殆ど行われていないことに直面して来た。教材、特に会話教材については、大規模な調査も行われておらず、現実に大学レベルでの中級日本語学習者（留学生）がどのような接触場面での日本語を必要としているのかも明らかになっていない。

2008 年に教材開発プロジェクトが開始されてから、中級レベル（JPN5 と JPN6）

でのシラバスデザイン、コースカリキュラムを作成するにあたって、筆者を含めたプロジェクト・チームでは、上述したような状況を鑑み、コミュニケーション・アプローチの理念に則り、教師主導でシラバスの決定を行うのではなく、学習者を起点としたアプローチを採用できないか模索してきた。そのようなアプローチの一環として、本調査は、学習者が現実遭遇するコミュニケーション場面（接触場面）を継続して調査することにより学習者の興味・関心・ニーズを重視した教材作りを行うことを基本理念とし、常に学習者の要望に対応する教材の開発をすることを目指している。その際、「接触場面」（ネウストプニー 1995:186-206）や「モジュール型教材」（岡崎 1989:34）などの教育理念を参考にし、実際に学習者が自分の日常で遭遇するような実践的な場面にこだわり、教室内と教室外の言語活動が乖離しないように配慮した。具体的には、関西外国語大学留学生別科で学ぶ英語圏からの日本語中級学習者に接触場面、ニーズ、興味・関心、使用教材（教科書）についてのアンケート調査を行い、その結果から得た学習者の視点から見た文法シラバス、あるいは、学習者が実生活で必要とする教室外のコミュニケーション活動（接触場面）を出来る限り作成教材に盛り込んで行くことなどを重視し、コースシラバス及びカリキュラムのデザインを進めている。

「接触場面」については、1981年にネウストプニーが「外国人場面」という概念で早くも問題提起を始め、日本語教育におけるその研究の必要性を説いている。例えば、話し手である外国人が日本語を用いて話す時、聞き手である日本人（母語話者）は外国人話者の言語能力にある限界を感じ簡略化した日本語を使用する（フォリナー・トーク）など、母語話者同士の場面とは異なる特徴があることを指摘し、そのような場面での外国人話者のコミュニケーション過程での誤用分析（問題分析）についてフォローアップ・インタビューを交えた調査の必要性などを説いている（ネウストプニー 1981:30-40）。ネウストプニーは、接触場面について、具体的に下記のように定義している。

外国人話者が日本語とはじめて接触するのは、ほとんどの場合、「接触場面」（「外国人場面」ともいわれる。）の一ケースの教室場面であるし、その後の数年間、接触場面にしか参加しないであろう。外国人が、母語話者によって、「準母語話者」として認められないかぎり、彼らの参加する場面は、接触場面なのである。

この接触場面は、「母語場面」(話し手のすべてが母語話者)とは、かなりの点で異なった特徴をもっている。したがって、今までの語学教育において、母語場面しか教育の目標にしてこなかったのは、あまり現実的な態度ではないといえるであろう(ネウストプニー 1995:187)。

ネウストプニーは、この外国人の「接触場面」でのコミュニケーションの問題について、今後の日本語教育においては、「接触場面」で「外国人がどのような内容についてコミュニケーションするとき問題に直面するか、そしてどのようにすればそれを避けられるかという指導」が重要であると提唱している(ネウストプニー 1995:44)。そのためには、接触場面における問題分析を行うことによって、外国人話者が自己の不完全な言語能力を認識し自分自身のコミュニケーションを変容させているという外国人話者側の特徴、と同時に、フォリナー・トークなどの母語話者側の特徴を調査し、接触場面での双方の特色を明らかにすることの必要性を説き、それらの特徴を利用しつつ最終的には母語話者から「準母語話者」と認められるような外国人場面からの脱却を図るための指導法の確立について論じている(ネウストプニー 1995:186-209)。

2. 接触場면을重視した教材作成：モジュール型教材の採用

ネウストプニーは、『新しい日本語教育のために』の中で、「日本語教育のための調査研究の第一歩は、接触場面のリストを作ることである」と述べ、新しいカリキュラム決定の際のシラバス作成時には、抽象的な学習者を想定して「体系的」作成された会話場면을リスト化するのではなく、あくまで想定される「学習者が実際に経験しそうなコミュニケーション場面を含む場面」の調査が必要であると指摘している(ネウストプニー 1995:218-219)。

また、ネウストプニーは、『外国人とのコミュニケーション』の中で、従来の「教科書」について「学習者を教室に閉じ込め、一定量の知識を非特定の相手に非特定の目的のために教える道具である」と述べ、伝統的な教科書は「コースの参加者の学習目的、経験や能力、学習者の場面などがさまざまであることを考えて」作成されているわけではないので、教師がコース時に学習者の実際のニーズに応じて学習項目の順番を変えることができないというような不都合についても鋭い指摘を行

っている。そして、将来の語学コースでは、現在の「教科書」よりはるかに広範囲の内容を含み、かつ、課（ユニット）の使用順位を必要以上に束縛しない「モジュール教材」の使用について提唱している。（ネウストプニー 1982:154-156）

このようなネウストプニーの提案を参考にして、JPN5 では、機能シラバスを採用した教科書を作成し、その際、留学生が実際に遭遇するであろう日常の接触場面（コンテキスト）に応じて日本語能力試験 N2 レベルの文法項目を組み込む方法を採用して教材作りを行った。また、JPN6 における教材作成では、ネウストプニーが指摘する従来型の教科書からの脱却をはかるために、「モジュール型教材」（岡崎 1989:34）という教育理念に則り、実際に学習者が自分の日常で遭遇するような実践的な場面にこだわりつつ、ユニットごとに「教材パッケージ」を作成している。モジュール型教材とは「教科書のように特定の順序に沿って一つ一つの課を学習するタイプの教材とは違い、学習者が既に学習し終わっている項目から一定程度独立して使えるようにした教材」である（岡崎 1989:34）。つまり、「通常の教科書が順序を無視して使うのが難しいのに対して、学習者のニーズが新たに生じたその時点においてそのニーズに合わせた形の活動を実施するような使い方を可能」（岡崎 1989:34-35）にさせるものである。日本語の中上級レベルにおいては、学習項目（文型）は提出順序を積み上げていく必要がなく、教材がモジュール型の構造を取っていれば、常に変化流動する学習者のニーズに柔軟に対応でき、情勢の変化に伴う学習者のニーズが新たに生じた時点で古くなった箇所のみ簡単に差し替えも可能となる。そうした観点から、本プロジェクトでは、初級に比べて文型の体系的な積み上げがそれ程必要ではない中級教材でこそモジュール型教材の特性が最大限に活かせるものと考え、モジュール型の教科書を作成することに決定した。

2008 年から継続している JPN6 のモジュール型教科書作成プロジェクトにおいても、日々の教室活動をいかに学習者が遭遇すると予測される教室外の言語活動に近づけることが出来るか、いかに学習者のニーズに寄り添った実践的な活動にできるかということを常に念頭に置いてプロジェクトを進めて来た。岡崎は「意味のある会話のできる力は、文法についての知識だけで構成されているのではない。他に、適切な状況で適切なことが言える力、会話を切り出したり会話に入ったり会話を終わらせたり、あるいは一貫性を持って話が展開できたりする力、また、自分の言いたいことを効果的に伝えたり、また上手く伝えられない場合には適当な

ストラテジーを使って切り抜けたりする力なども文法知識に勝るとも劣らないくらい重要である。」と述べている（岡崎・岡崎 2001:82）。中級レベルの談話や対話形式での会話練習においては、このような会話の「適切さ」を身につけ、様々な接触場面で自分が言いたいことを自分らしく表現できる能力がより求められるようになることは必至であろう。そのためには、やはり、教師側が常に意識的に教室活動を実際に学習者が教室外で遭遇するであろう接触場面での言語活動に近づけて行く工夫が必要ではないかと思われる。

3. 接触場面アンケート調査

学習者の接触場면을重視した教材開発の実践については、各ユニットのトピック（大場面）の設定時に学習者の個々のニーズや個性を自発的に引き出せるようなカリキュラム・デザインを参考にして（岡崎他 2003:227）、まず、2004年から担当コースの中上級学習者にアンケート形式で、「どのような場面、状況で日本語を使用したいか?」「日本語を使用して、何ができるようになりたいか?」という質問をして、簡単なレディネス調査、ニーズ調査を継続して行い、毎学期、教材作成に活かすようにしている。更に、JPN6のモジュール型教材作成プロジェクトが2014年のIRIプロジェクトに採択されて以来、コース担当教員が各学期後、使用教材についてのアンケート調査も行っている。それらの回答の分析結果を参考に毎年、コースの教科書として採用しているモジュール型教材の改訂を行っている。ネウストプニーが説いているように、より詳細な調査が必要ではあるが、関西外大の中級日本語コース（JPN5及びJPN6）でも、上述したアンケート調査や教材についての評価を用いて、関西外大で学ぶ留学生が実際に経験しそうな接触場面の調査を行い、現状で調べ得る学生のニーズ、興味・関心のある話題を取り込みつつ、シラバスや教材を作成してきた。

ネウストプニーは、学習者と母語話者の双方を含む接触場面実態調査は、接触場面で学習者が実際にどのような意識を持ちコミュニケーションを遂行したのかを調べるためのフォローアップ・インタビューの必要性を述べている（ネウストプニー 1981:38）。しかし、現時点でもそのようなフォローアップ・インタビューを伴った本格的な接触場面実態調査の先行研究は、オーストラリアの上級学習者を調べた尾崎の調査、母語話者のフォリナー・トークについて初めて調査したスクーターリ

デスの例、立命館アジア太平洋大学の初級学生について調査した片山・菅の例、千葉大学のアジア圏の中上級レベルの留学生を調査した内海・吉野の例などが挙げられる（尾崎 1981、スクータリデス 1981、片山 2010、内海・吉野 1999 など）。本論の調査は、現時点では、そのような学期後のインタビューを伴った実態調査ではない。しかし、岡崎は、コミュニカティブ・アプローチの新たな段階として、古川の資料（古川 1989）を引き、シラバス設定の際、言語学習項目（文型）先行をするのではなく、まず学習者が学習を希望するトピックやテーマを調べ、それを学習内容として先に設定し、その内容を学習する手段として言語学習項目（文型）を設定することを提唱している（岡崎 2001:7-8）。本学の中級日本語コースにおけるシラバス作成でも、まずアンケート調査で、留学生のニーズ、興味・関心を調べ、その結果を出来得る限り、文法項目の選択時、教材の作成時に活かすようにすることから始めることにした。今後の研究課題として、更に詳しく留学生の接触場面の実態調査を行い、フォローアップ・インタビューで実際のコミュニケーション場面での意識調査に繋げていきたい。ここでは、「どのような場面で日本語を使用したいか？」という現時点の簡単な調査ではあるが、中級前期コース（JPN5）の留学生に対して行われた、2017 年秋学期、2018 年春学期、2018 年秋学期の過去 3 学期の接触場面アンケート調査について報告する。留学生の内訳は、下記の通りである。

2017 年度秋学期

男女比： 男子学生 14 名 女子学生 14 名

国籍： アメリカ 17 名、中国 5 名、カナダ、イギリス、オーストラリア、ドイツ、スペイン、フィンランド、アイスランド各 1 名

母語： 英語 18 名、中国語 4 名、
スペイン語、ロシア語、アイスランド語、フィンランド語各 1 名

専攻： 日本語 7 名、国際ビジネス 3 名、経済学 2 名、日本研究 2 名 など

2018 年度春学期

男女比： 男子学生 12 名 女子学生 15 名

国籍： アメリカ 19 名、メキシコ 3 名、オーストラリア 2 名、
スウェーデン、カナダ、ニュージーランド各 1 名

母語： 英語 15 名、スペイン語 3 名、
ロシア語、ハンガリー語各 1 名
専攻： 日本語 8 名、アジア研究 3 名、国際ビジネス 2 名、映画製作 2 名、
国際関係 2 名、英語 2 名 など

2018 年度秋学期

男女比： 男子学生 8 名 女子学生 18 名
国籍： アメリカ 17 名、イタリア 2 名、ロシア 2 名、
韓国、台湾、スペイン各 1 名
母語： 英語 14 名、中国語 3 名、ロシア語 2 名、イタリア語 2 名
韓国語、広東語、アラビア語、スペイン語各 1 名
専攻： 日本語 8 名、ビジネス 2 名、国際ビジネス 2 名、 など

関西外国語大学留学生別科の留学生は、ほとんどの学生がアメリカを中心とする提携校との交換留学生（留学生の 80% はアメリカ国籍）で、日本語コースの他に英語で国際政治、ビジネス、歴史などのコースも履修する必要がある。であるので、国籍や母語が様々でも、留学生は全員、英語を母語、あるいは、第 2 言語として身につけており、媒介語として英語を使用することが可能である。中級コースを学ぶ留学生の年齢層は、大学 2 年生から 4 年生がほとんどで、いわゆる成人学生（*mature aged students*）は、学期によって異なるが、大体数名程度に限られる。

では、まず、学生が日本語を実際にどのような場面・状況で使いたいと思っているのかについて聞いたアンケート調査の結果を図 1 に示す。回答は複数可とした。

図 1 によると、筆者が担当した JPN5 コースの 3 学期留学生総数 81 名のうち、明確な場面は特定できないが、とにかく日常生活全般で日本人と話す時と回答した学生が 50 名で、一番多かった。誰と話したいのか回答した学生のうち、30 名以上の学生が、日本人の友人（日本人学生）と話す時と答え、その他は、ホストファミリーと話す時 6 名、日本人の店員と話す時 3 名、料理の注文時 2 名、日本人の彼氏の両親と話す時 1 名、日本語教師と話す時 1 名、日本語クラスで 1 名、道を尋ねる時 1 名などの回答であった。理由を書いていた学生は、3 名が「将来、日本に住みたいから」と回答していた。この結果を踏まえて、関西外大留学生別科の中級日本

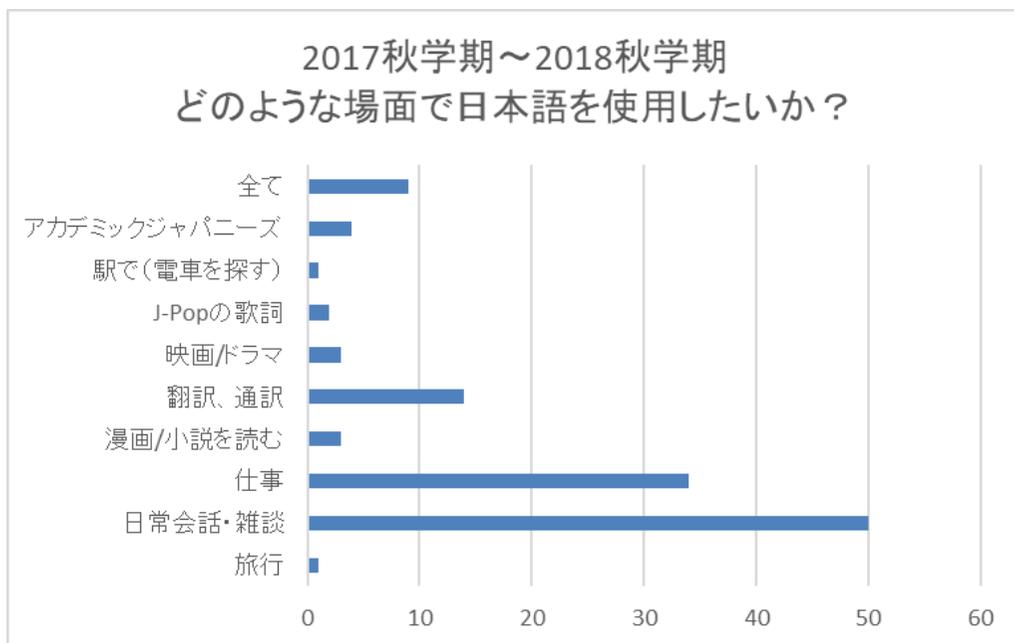


図 1：2017 年春学期～2018 年秋学期「どのような場面で日本語を使用したいか」

語コース、JPN5 と JPN6 では、学期中、一つの課を友人同士の「くだけた会話」の習得に充て、「～ている」が「～てる」になる、「～ておく」が「～とく」になる、「わからない」が「わかんない」になるなどの話し言葉に見られる音の変化、助詞の省略、あいづち、短縮句、繰り返しなどの使用法を習得するための教室活動を行っている。

また、中級レベルでは、現時点でははっきり特定できないが、将来何らかの形で将来日本語を自分のキャリアに活かしたいという学生が 34 名と数多く見られた。具体的にどのような分野の仕事で日本を使用するか回答していた学生の内訳は、外交関係 2 名、英語を教える時 4 名、エンジニア関係 1 名、米空軍 1 名、日本で起業する時 1 名、国際環境政策を日米で行うとき 1 名、映画関係 1 名、アルバイト 1 名、貿易会社 1 名、俳優 1 名、出版関係 1 名であった。また、「将来、翻訳家になりたい」と回答した学生も 14 名おり、中級レベルでも、出来る範囲で翻訳技術などについて、今後の教室活動に取り入れていきたいと考えている。

次に、「留学生がどのようなことに興味・関心を持っているか」についてのアンケート調査の結果を学期ごとに示したい。鎌田は、2001 年に行われた「欧州教材プ

プロジェクト」の会議で扱われた「接触場面アンケート調査」について報告している。鎌田は、その中で、どのような接触場面で学習者が日本語を使用するかについて接触場面の目録化を行い、そこで集められた接触場面をどのように具体的に学習項目として教材化していくかについて述べている（鎌田 2003:353-369）。鎌田の提案を参考にし、接触場面アンケート調査の結果から明らかになった場面について、更に具体的にコース教材に活かしていくためには、留学生が日常会話でどのようなトピックについて話したいのかを調べる必要があるだろう。上のアンケート調査で、関西外大で学ぶ中級レベルの留学生のほとんどが日常生活で日本人の友人と日本語で話したいというニーズがあることが分かった。これを受けて、留学生が日本人の学生と具体的にどのような話題で、どのような内容の会話をしたいのかについて、彼らの興味・関心を知っておくことは大切なことであろう。毎学期、変遷する留学生の興味・関心を調査によって明らかにし、教師は、その結果を随時コース教材の改訂に活かしていくことが肝要だと思われる。

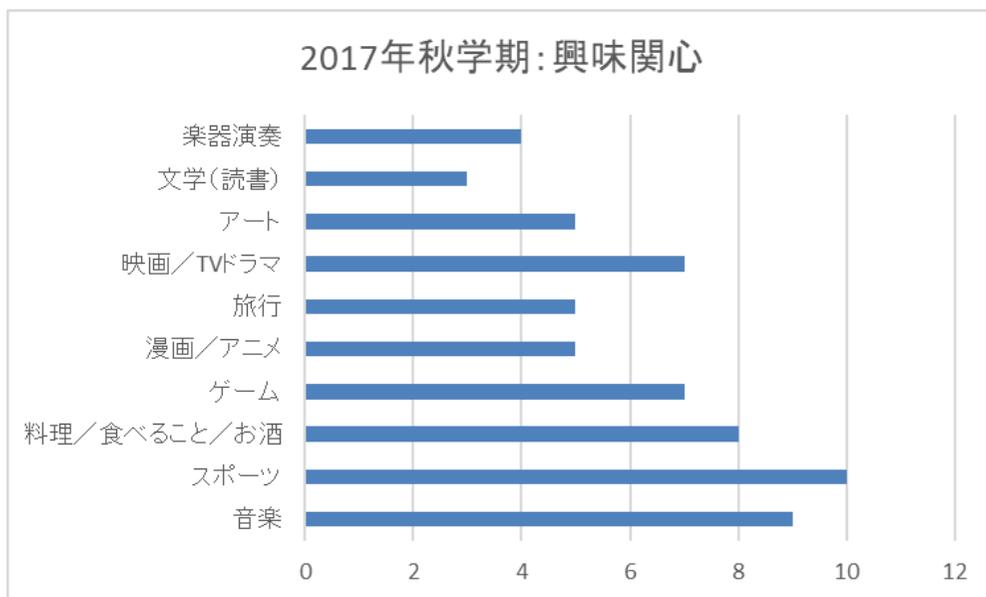


図 2 : 2017 年秋学期「興味・関心」

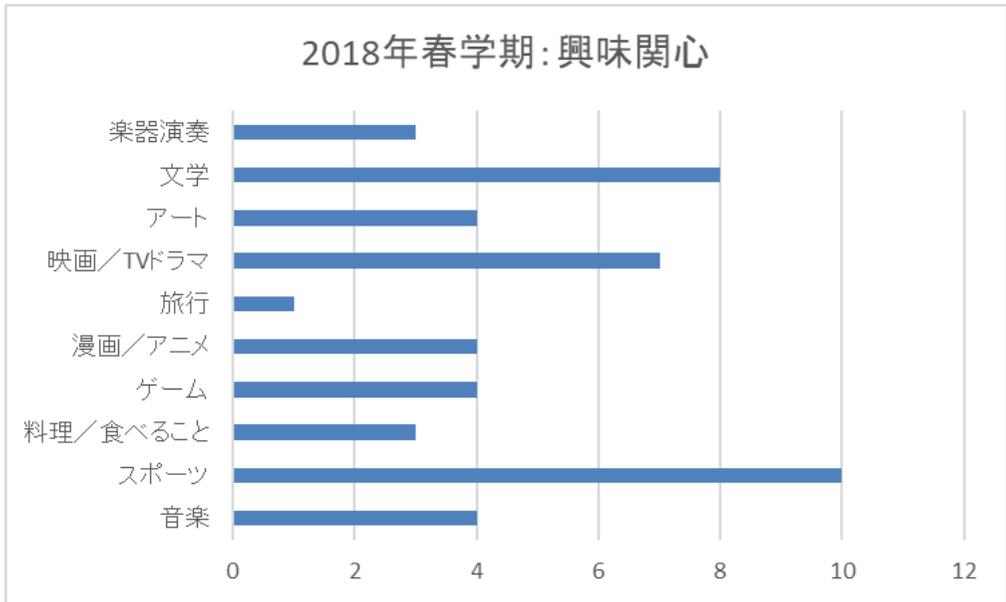


図 3 : 2018 年春学期「興味・関心」

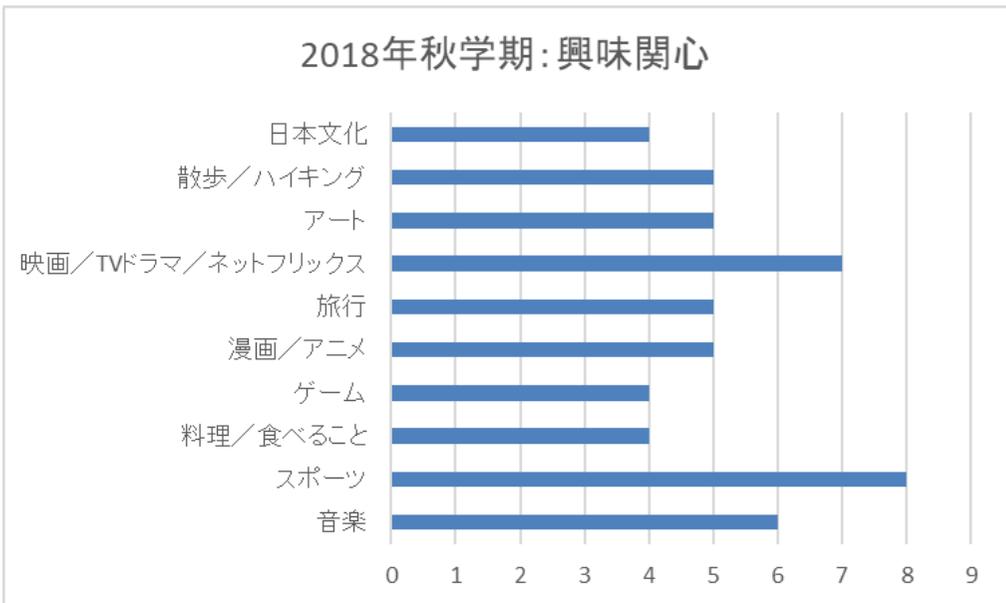


図 4 : 2018 年秋学期「興味・関心」

図 2 から図 4 の過去 3 学期のそれぞれのアンケート調査結果を見ると、関西外大の留学生の興味・関心は、「スポーツ」、「音楽」、「ゲーム」、「漫画/アニメ」、「映

画／TV ドラマ」の五つの分野がどの学期でも大きな割合を占めていることが分かった。それぞれの分野で具体的に何が好きなのかは、紙面の都合で割愛するが、最近の傾向として、音楽では、K-Pop、映画／TV ドラマでは、Netflix によるドラマや動画の視聴を挙げる学生が散見された。また、文学（読書）、アート（絵を描く）、楽器演奏、料理などにも高い関心があることがわかった。また、2018 年春学期は、文学（読書）に興味がある学生が特に多く、2018 年秋学期はハイキングが好きな学生が多いことが見てとれる。このような学期によって特化した傾向についても、教師が事前にしっかり把握したうえで、コース教材に適宜、改訂を加える必要があることも分かった。コースで使用する会話教材の作成の際には、以上のような分析を活かして、学期ごとに学生の好みをその都度取り入れてダイアログを改訂するなど、積極的に留学生の興味・関心のある話題を教材に随時組み込むことで、今後も学習者側から発信したものを出来るだけ教材に反映させていきたいと考えている。そして、今後、留学生の興味・関心についても、更に詳しく具体的にインタビューを交えて調査し、具体的に日常会話で、いつ、どこで、誰と、どのような内容について話したいのかを明らかにするための実態調査へと繋げ、接触場面の目録を蓄積していきたい。

4. 接触場面の教材化

以上のように、現状では不完全なものではあるが、関西外大留学生別科での中級日本語コースでは、接書場面のアンケート調査の結果を分析し、その都度得た新しい学生のニーズ、興味・関心を反映するように既存教材を書き換えることを継続して行っている。鎌田は、コミュニケーション場面については、あくまで、「場面（コンテキスト）あつての文化情報であり、また、場面（コンテキスト）あつての文法なのである」と述べ、「接触場面を絞り込むことは、文脈（コンテキスト）から文型(学習項目)を探り出す作業と同質」であると指摘している(鎌田 2003:363-365)。また、鎌田は、接触場面から会話文を作成する際には、「活動中に生じた言語的挫折をどのようなストラテジーで修正するか、どのような非言語的メッセージが意味交渉にどのように関与しているかなど、多種多様な要素が詰まっている」ことを指摘し、教師は接触場面を教材化する過程で、学習者のレベルに応じた言語活動の機能難易度を見極める必要性を説いている(鎌田 2003:365-368)。 関西外大留学生

別科の中級日本語コースでも、鎌田のそのような指摘を考慮し、留学生の接触場面アンケート調査の結果を取りいれつつ、まず、「感情を伝える」などの大場面から、「日本人の友人に自分の好き嫌いについて感情を込めて伝える」などの特定場面へと場面の絞り込みを行い、その場面で使用される中級語彙、中級文型を選定するという過程を踏むことにしている。その際、鎌田が指摘する接触場面における複雑で多種多様な「言語活動の機能難易度」を見極めながらコースのレベルに合わせて、日本語能力試験 N2 レベルでよく使用される文法項目（文型）の中で、ある文法項目が最も自然で無理なく使用される場面を選ぶという方法を採用した。あくまで留学生が望む場面を先行させつつも、N2 レベルのそれぞれの文型がどのような場面で用いられるか、あるいは、効果的に使用されるのはどのような場面であるかを考慮しながら、コースシラバスで習得すべき文法項目の選定を注意深く行った。下記は、JPN5 コースの第三課で行われる教室活動の一例である。

接触場面：

大場面：「感情を伝える」

特定場面：

「日本人の学生（友人：まき、ゆうじ）に自分の好き嫌いについて、感情を込めて話し合う。」

文法項目：「～ほど／くらい～」「～たくてたまらない」

新出単語：「～に夢中だ」「～にはまっている」「曲」「感情を伝える」

ペアワーク：

パートナーと下の会話を作って、練習しましょう。

1. You: ねえ、まきちゃん。
 (e.g a name of the artists you like) _____ の曲って、
 よく聞く？
まき: うん、聞く聞く！ _____ くらい、大好きだよ！

2. You: ゆうじって、ひまな時、何をしてるの？
ゆうじ: 実は今、スマホのゲームアプリに、はまっているんだ。
毎晩_____ほど、やっちゃうんだ。

3. [自分のことを教えてください。]

まき: ねえ、今、夢中になってることって、何かある？

You: そうだなあ。_____かな。
_____たくて、たまらないよ。

5. まとめ

岡崎は、2001年の論文(2001:1-11)で、日本語学習者の多様化に対応するために、これからの日本語教育において、コミュニカティブ・アプローチがいかなる可能性を秘めているかという問題について一人一人の教師が検証する方法について論じている。それから、すでに20年近く経ち、日本語学習者の多様化はますます進行しているように思われる。二通が「国内の日本語教育の広がり」(2006:10-32)の中で論じているように、国内の日本語学習者は、語学学校の教室内だけに留まっているわけではなく、それぞれの地域の様々な場所へと拡がりを見せている。本学で学ぶ英語圏を中心とする交換留学生を見ても、彼らの来日の動機は多岐に渡り、彼らのニーズも専門化、細分化して来ているように感じる。学習者の興味・関心は、個別化して来っており、学生によって千差万別である。また、自分の好む物に対しては大変専門的な知識を有するが、自分の興味・関心の枠を外れたものには全く興味を示さないといった傾向も多く見られる。更に、彼らの興味・関心が流行に合わせて流動変化するスピードも以前とは比較にならない程早く、ある時の留学生の興味・関心に合わせて時間をかけて作成した会話教材も、その翌年には全く使えなくなることも増えてきた。

インターネットが普及した社会で、このように以前とは比べ物にならないスピードで変遷する学習者のニーズの多様化の中で、更に、関西外国語大学留学生別科に留学に来ている英語圏を中心とした中級学習者という一つの観点から、彼らがより主体的、自律的、自発的に学習を進められるような日本語教育の在り方、そのための教材開発について、今後も模索を続けていきたいと考えている。言い換えれば、

正しいか間違っているかのような二項対立的な枠に学生をはめ込むような教材ではなく、最終的な答えを出させることを目的としない、一人一人の学生が自分のやりたいことを実現させるため、それぞれのその場の適切なコミュニケーションの積み重ねの過程を重視した教材の在り方を問い続けるということである。そのためには、フォローアップ・インタビューを交えて、彼らの興味・関心、ニーズがどこにあるかの更なる広範で綿密な調査をすること、その結果を分析し接触場面の目録化を行うこと、その中から学習者が望む場面での中級レベルに適した会話トピックを先行させながら文法項目を選定し、教材化していくことが必要であろう。毎学期、学生へのアンケート調査、インタビューを基に教材作成のための接触場面を蓄積していけば、その都度、変遷する学生の興味・関心に合わせて、どのような場面で日本語を習得したいかを学生にコース前に選んでもらうことも可能になるだろう。

このような学習者の多様化という現実の中で、これからの日本語教師には何が求められていくのだろうか。岡崎は、学習内容、学習過程、学習成果などについて学習者を起点としたコミュニカティブ・アプローチを採用した教室活動であっても、「それを取り上げる教師により、自分の頭で考え、自らの頭で問うことを通じて日々新たに練られて行かない限り、形骸化してしまう」と警鐘を鳴らしている（岡崎 2001:1-11）。岡崎は、これからのコミュニカティブ・アプローチの可能性は、「日本語教育の現場の提起する諸問題に対応できる形で捉え、組み換え、適用して行く中でしか確かめることができない。言い換えれば、個々の教師が新たに構築して行くことを通してしか見極めることができない。」と述べている。一人の留学生が関西外大留学生別科の交換留学生として来日した時、彼／彼女は、「関西」という地域性（例えば、関西の習慣、マナー、関西の食文化、関西人の特徴、関西弁など）の中で日本人・日本語に触れ、彼／彼女自身が持つ独自の文化社会的価値観で、個々のニーズと興味・関心を持ち、日本語学習に臨んでいる。我々日本語教師には、自分が担当するそのような学生について、一人一人がそれぞれの地域で接触するコミュニケーション場面の中で日々発信するもの、望むものを不断に受け取り、日々新たに教材化していくという態度を身につけることが求められているのではないか。これからの日本語教育の中で、接触場面アンケート調査から学習者が発信するニーズ、興味・関心の在りかを常に知っておくことは大変重要な意味を持つのではないかと感じている。

参考文献

- 庵功雄・山内博之（編）（2015）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 内海由美子・吉野文（1999）「短期留学生の日本語実際場面の実態と分析—ネットワークの観点から」『千葉大学留学生センター紀要』5, 30-55 千葉大学留学生センター
- 岡崎敏雄（1989）『日本語教育の教材』アルク
- 岡崎敏雄（2001）「コミュニケーション・アプローチ—多様化における可能性—」『日本語教育』73, 1-11 日本語教育学会
- 岡崎敏雄・岡崎眸（2001）『日本語教育における学習の分析とデザイン 言語習得過程の視点から見た日本語教育』凡人社
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉（編）（2003）『日本語教師のための知識本シリーズ③ 人間主義の日本語教育』凡人社
- 尾崎明人（1981）「外国人の日本語実態（2） 上級日本語学習者の伝達能力について」『日本語教育』45, 41-52 日本語教育学会
- 片山智子・菅智穂（2010）「日本語初級学習者の接触場面に関する実態調査」『ポリグロシア』19, 79-89 立命館アジア太平洋研究センター
- 鎌田修（2003）「接触場面の教材化」 宮崎里司・ヘレン・マリオット（編）（2003）『接触場面と日本語教育 ネットワークのインパクト』明治書院
- 小林ミナ（2009）「基本的な文法項目とは何か」小林ミナ・日比谷潤子（編）『日本語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』pp.40-61. 凡人社
- スクータリデス・A「外国人の日本語実態（3） 日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45, 41-52 日本語教育学会
- 田中祐輔（2015）「初級総合教科書から見た文法シラバス」庵功雄・山内博之（編）（2015）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 二通信子（2006）「国内の日本語教育の広がり」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』pp.10-32. アルク
- 野田尚史（編）（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 古川ちかし（1989）「内容優先・学習者重視の日本語教育」The first conference on Japanese Studies 配布資料、The National University of Singapore

J.V.ネウストプニー (1981) 「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45,
30-40 日本語教育学会

J.V.ネウストプニー (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書

J.V.ネウストプニー (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店

(mtakayas@kansaigaidai.ac.jp)